

小学1年生の歩行中の死傷者は6年生の3倍以上! 新1年生を交通事故から 守るには?



1.小学生の交通事故の特徴は?

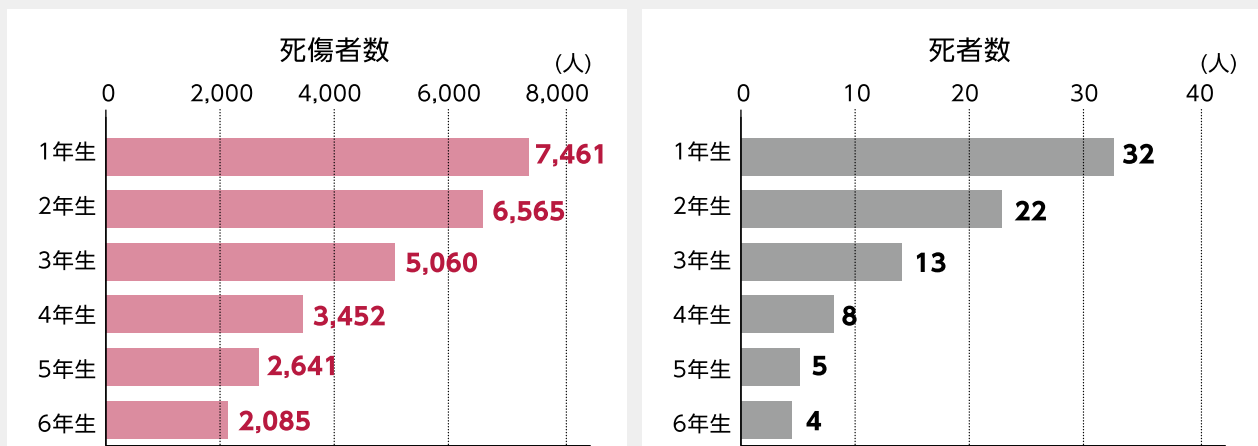
警察庁が平成25年(2013年)~平成29年(2017年)に起きた交通事故を分析したところ、歩行中の小学生の死傷者はこの5年間で2万7,264人に上ります。

学年別にみると(図1)最も多いのは小学1年生の7,461人で、学年が進むにつれて減少し、最も少ないのは小学6年生の2,085人となっています。死者に絞ると、最多は小学1年生の32人で、最少は小学6年生の4人となっています。

歩行中の交通事故については、死傷者では小学1年生は6年生の3倍以上、死者に絞ると8倍に上ります。



図1 小学生の歩行中に交通事故(平成25年~29年)



(警察庁「児童・生徒の交通事故」「小学生歩行中の交通事故」より)

小学1年生になると行動範囲が広がり、子どもだけで行動することが増えます。登下校を集団で行う場合でも、集合場所と自宅の往復は子どもだけで歩くことがありますし、下校時に道草をしたくなることもあるでしょう。小学1年生は、いわば自分一人で歩く「一人歩きデビュー」の時期でもあります。子どもたちが交通ルールを身につけ、無事に一人歩きデビューができるようにするために、大人にできることは何でしょうか。



2.事故防止のために子どもに教えられることは？

小学1年生が安全に道路を歩けるようになるためには、家庭でも交通安全教育を十分に行うことが重要です。子どもが小学校に入る前から、また、小学校に入ってから、通学路や公園など子どもの行動範囲と一緒に歩きながら、繰り返し交通ルールや安全な歩き方を身に付けさせましょう。

安全な横断の仕方をしっかり教えましょう

小学1年生の歩行中の交通事故は「横断中」に多く起こっています。子どもが安全に道路を横断できるようにするために、次のことをしっかりと教えましょう。

- 横断歩道橋、横断歩道や信号機が近くにあるときは、そこまで行って横断すること
- 横断する前に、「必ず立ち止まる」「右左をよく見る」「車が止まっているのを確認すること
- 信号が青のときも、必ず右左を見て、車が止まっていることを確認してから横断すること
- 横断中も、右左を確認しながら歩くこと



子どもの目線で確認しましょう

子どもと大人では目の高さが大きく異なります。大人ならば遠くまで見通せる場所でも、子どもの目の高さからは見通せないことがあります。道路脇に止まった車、塀や生け垣、立て看板などがあればなおのことです。

子どもと一緒に通学路などを歩き、子どもの視点から交差点や横断歩道、見通しの悪い場所などの危険箇所を確認しましょう。



3.事故防止のために大人ができることは？

子どもに交通事故防止を教えるためには、まず、周囲の大人が普段からお手本を示すことが大切です。子どもが見ているところで、信号を無視したり、横断歩道がすぐ近くにあるのに、違うところを横断したりしたことはありませんか。子どもは大人の真似をします。子どもが交通ルールを守って、安全に道路を歩けるようになるために、大人も交通ルールを再確認し、交通ルールを守りましょう。

また、自動車やバイク、自転車を運転する方が路上で子どもを見かけたときは、子どもは自動車などに気付かないものと考えて、運転者側が速度を落としたり、子どもから間隔を開けたり、一時停止したりするなどの配慮をしましょう。

子どもが道路を横断しようとしているときは、安全に横断できるよう一時停止し、渡り切るのを確認してからゆっくり発進しましょう。通学路や住宅街では、子どもが急に飛び出してくることもありますので、速度を落として通行しましょう。信号のある交差点でも、子どもを見かけたら飛び出していないか確認してから発進しましょう。特に、下校時は、学年ごとに行動が異なり目立ちにくいので、運転に当たっては気を付けましょう。

交通事故から大切な命を守るために、運転する方も、歩行者の方も、思いやりの気持ちをもって、子どもたちの安全な歩行をサポートしましょう。

